

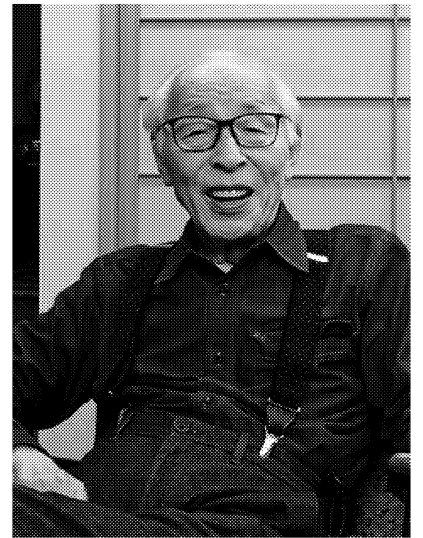


舞台照明の先駆者が回顧談をまとめ終えて、一言。

「よくまあ、これだけやったなあ」。1954年から始めて、作品数は1500を超え、演劇、オペラ、コンサート、何でもやったから、戦後の舞台芸術を俯瞰する一書となった。

照明家と書いて「あかりや」と読ませるのは、幕内の言い方による。いささかの自嘲とその反面の矜持が題名にのぞく。道具の寸法を勝手に変えてしまう幕内の因習的雰囲気に対し、

あかりや
「照明家人生」 吉井 澄雄氏



(よしい・すみお) 1933年東京生まれ。53年、劇団四季創立に参加。近代照明確立に尽力し、ミラノ・スカラ座など海外の舞台も手がけた。日本照明家協会名誉会長。

「歌舞伎を支え続けたが、最初は自分の照明が歌舞伎に合うか自信がなかった。「鶴屋南北が生きていたら、吉井さんに頼んだでしょう」と背中を押されたとい

よくまあ、これだけやったなあ

う。一方で、歌舞伎に精通する松竹トッパ

光の表現を近代的な芸術に押し上げる役になった。「歌舞伎のフラットな照明が主流だった日本で、彫刻的で立体的な光は新鮮に見えたのでしよう」

ドイツのオペラハウスで 二代目市川猿翁のスーパ

衝撃を受け、緻密な照明を導入したが、いつも暗いと評された。「暗い面積の方が大きいから仕方ないが、必要などころには強烈に光が入っていると面白い」

姿を消した。が、舞台を見たあとと自分の出演する舞台の照明を頼んできた。今年亡くなった演出家、浅利慶太らと劇団四季を創設した。デビュー作「アルデル又は聖女」は「黄、赤、紫と気負って色を出すひどい照明だった」にもかかわらず、演出の浅利は何も言わなかった。「今でも感謝しています」

浅利、蛭川、猿翁、リサイタルをずっと手がけた越路吹雪。ドラマの時間を光で生み出す演劇的照明への信頼あればこそ、彼らは注文をつけなかった。

もめにもめた新国立劇場開設にいたる秘話や機械の進歩なども貴重な証言だ。(早川書房・2700円)